俳諧玉爾波物

六

ヘ 5
1865
6

帝國圖書館藏

○十二身

○氏身

て

てしく　かまくらつぶるるあれどもせうせうなれ
ばかなり　あまつぶ　逃てくゆるなるまと
ゆくわぎとつるるさるかはとすなり　手をぐてと
ゝ　人の目よりもあらしてそのそのそのそのそ
持ちかどするがゆえかなり

荒　おりつるるやぐるるまを　芭蕉

この白なぐ　てのほうをるる　面白ふ

[illegible]
モナホサズトイフ心ナレ(ト)抽頭抄ニ垂シコレラノやぐく
イトヨクオカレタリ・俗語ノやぐく ニハアラザルナリ　さわぐ・てはすべ
て片寄つるものとんのさわぐ時よりつるもつるもと
さとす詞とぞ聞ゆる

炭　栗を苅しかれく ひろき畠地　梨
日　たくぶり拾ひあつめく 栗ひろふ　柿園
日　なしよやく 鳶一羽 年のくれ　賀月
棟　時うすかりて ふり霧する 秋　芭蕉
荒　月もなくて 酒のむひとりぶ　日
日　まち柳しよりまちわく 蓮子 車れ　素秋
日　七草をとりきたりて ほるぶ　俊仏
日　なくしてすぎて 秋の暮　一井

六ノ一

続　ヌぐらや 裸ぐ 却て 教やまと　岩蘭
日　五六十 海苔 書して 穀一つ　之道
荒　門 [illegible] 輪 一ト 荷ひ　内習
続　きて [illegible] 帰て [illegible] 暮の [illegible]　胡及
炭　梅 [illegible] 河 [illegible] くづれ [illegible]　梨
荒　つ [illegible] 百 [illegible] 示　一井
続　演 [illegible] 筆をゆくて 年のくれ　呂丸
炭　[illegible] の月 [illegible] 旅 大立　依く
日　魚 [illegible] 芭 [illegible] 冬の月　里东
猿　[illegible] 抱くゆくて　九兆
炭　田の畔 早 [illegible] 把て 抱く 魚　[illegible]
猿　[illegible] 墨 [illegible] 秋 [illegible]　史邦

炭　江戸の方たむりの女ども　芭蕉
コレハ上へカヘルてイナリ・のりくらそ江戸の方ともふりトイフ句意ナリ
員　雪ぐれ丹精よいづる蕎麦けく　荷号
コレモいづるトイフ所ヘカヘス為ニオキタルてイナリ
猿　蕎麦のあしは仕舞ふくかへる　經机　四季
春　やどの畑世話ふきぐみくきをしく寸　吳葉
員　けしきなりて魚のあとをきき　一井
猿　うまかりよりなりて猫の交るがめ　去来
日　潮まさりそ川きくの月　梅風
日　戸隅にて蜀うつて蕎麦月　乙州
炭　人よ家を買いやくられる忘　芭蕉
　　茶のうり置きをさげく賣出す　孤屋

日　其よりて富ふちちふく紙の衣　日
日　頭ってかくもちみやて蕎麦　枯　嵐雪
瓢　月ふちくく俳の内裏の司め　深川
春　ふて家るわくの無月うけく　冬文
炭　ちくくわ雨ふまて秋の風　梨半
徒　もちて竹ふる新のやまふ　四季
日　初雪ふくぶて涼し氏乃土　芭蕉
瓢　砂の小まの　痩くふふく　里東
猿　軽乃口霞をうふて氣味よ　芭蕉
員　月の名書をりちふ中に痩く　炭人
猿　こ乃木戸や頭のさわくみふ月　三角
日　常齋ふふ　ふ郎

続　繁りつけく卅そ昇り　屋の馬　史邦
荒　るとゆとりまりて田を新に　嫁うる　性空
曰　ちりつもりて　笑をとゝむる　柳かな　晨爲
続　天鵞毛の対布さげて　夏の雲　惟然
荒　ゆやゝてゆの　初のかゝり　霧うる　花交
曰　神すりて　松乃集　ちる　名月の　杉舟
続　苓る　畑や　まぬ　ぶ　まりて　佛生世　乙州
曰　よりに　寝て　絶る　蔦　名　忘　支考
荒　きゝ　ゆ　打　ゆ　る　名　食ぶ　杉舟
続　雪　よ　ぶ　て　里　庶　ぶ　里圃
発　見　ゆ　け　ゆ　し　冬の月　我眉
曰　上　塗　な　ゆ　ぶ　く　壁　鉄屋

六ノ三

曰　ぶ　ゆ　ま　ま　く　又　蘇　鉄　屋　ゆ　川　野坡
曰　明　ま　ま　ま　く　名　桃　竹　ま　ま　て　鉄屋
曰　箱　こ　ら　つ　く　鶯　節　ゆ　ら　野坡
冬　抱　れ　ま　ま　く　ぬ　る　ゆ　鶯　の　る　凡　羽笠
○て　れ　つ　ら　の　ま　ま　ま　く　ま　ま　る　ま　ま　る　ま　る　ま　る　ま　る
集　山　ま　ま　れ　寒　柑　の　名　凡　芳　ま　る　て　芭蕉
この句、蜂の巣のまみ花ぶさ隅のあぶ、ぶづゝ
ひ抱くるての字なり
集　きよくきうん　耳　る　春　抱　て　ま　ぶ　芭蕉
曰　徒　芋　や　苑　の　さ　ま　を　費　ゆ　て　曰
曰　ま　ぶ　ま　ゆ　や　ま　凡　神　縄　ま　ま　ま　ま　曰
ま　ま　の　て　の　宝　ふ　上　へ　つ　る　ら　ま　ま　は　ま　れ　ま　る　ま　り

○てんとうのこと。すむてんにごるてんあり。濁るを例とす。すむ
むく。かつあるてを文かりあわと。いるびを外の事に加るく
づきもくるを詞なり。てとともに作る詞也。かの駿馬が
手ほ猛高を「われはまことの成。宝蓋「引ぬきを垂
るもひを大うを閉を似る詞なれどなり

炭　ものくを やををしぐれする軒　野鼓

猿　押合く 痛てくまをこいう牝　菖蒲

日　草 高を まどくを ていを 破り　日

馬　ふてぐを ふくを なをを 敷なをげ　蹴鞠

員　なを事 ものをうひてを 光び　蒲原

炭　雞 みをを まを 鼾 かを　野被

ふくのかを。てをとをいをくをの例なをを白あり

炭　とうあんめをを多き 精進日　曾良

こわく。てこわぐなどのをもどのかをりとをるぐ。にごるてを。
平をの八神をを「てとぐめをぐ「此ぐをぶにすぐてぐをどよ
り。こわを。タラバとをのほどれんや

○甚外てをてん てまを てを てを てを てを てぐりてぐを
てあなどはをあり

員　かををれをも 浅をあをいひにをき　一井

荒　高をもを ぜひを 紫ひを つぶ　蕉

日　冷けを 甚あをを ようや を の 佐　胡及

○てんとうの事 ものをあり。んを よををるぐぐ。をわぐ 此て
とんとの詞の詞なをぐを詞なりを 心 を てをぐ。たを ぐ
「ををを ものをを ひてんとをひ。「ををを 拾をを をを

[illegible]

[illegible]

[illegible]

炭　秋の空ちとせの山に秋よそ曇り　其角

猿蓑　中ゆより壁高く狐狸ものどもえり　芭蕉

いづまとつるつるづづく。ての字のもの。何ぞまこうる物と
みるべし。たとへば。はゐ住菴記の「ものゝ思ふらりとつく。狐
狸ものどもえり」なるやうなるものなり

○このかしたるたんたれぐらぐらぐれやぬしなど。
さらしくるはるかり。これぐらぐらとうつ。黄ようづづく。
鐘の字まわぐ。いうしてものかるあるこ。りとうまるかるく。与
くく何しる何しる中ま空くいつかり。けあよ何ニテアルソ何
とうまわるべし。ふるとうはく。伊佛まわぐ。例の内ようて
いみわ。さりようなしかあるくるつるなり。これみりまるぐくテアルと
いう関ると。異もる何あるゆやみるべく。倍ようよ「ねりうるみる

「ものぐくあるなどいみ。られてのまれるまる「ある」ぐ
の何ようあるゆ。られてどうふ音楽のもりしるあるまわぐ。五
十音ゆるるひぐ伝ずぐゆや

炭　吹くられる笠ちりとゆく　梨半
口　触れの慢ゆられる秋乃ち　俳水
集　年ちや猿ようまんせる猿の酒　芭蕉
冬　つの猿ようるるひられる片底　羽笠
炭　うんぐ果る八雪のかり　梨半
春　うつのうるる生ちれ月　猿蓑
猿　さ本門きたる月のあぐる夜　凡兆
炭　老僧も袈裟ぐるる花見かな　之道
冬　仏　塗るる魚ちぐき　芭蕉

炭　早乙女よ　うくらうる　菜種の　岩雲
猿　二階の　やそ　やしまる　秋　芭蕉
炭　切髪の　くひのうたる　梯子　路傍
猿　おりい　切る　死ぬる　ひろ　支部
員　そのべよ　やうらうる　雪踏が　書　御子
猿　ほつれる　まゆの　高ぶれ　やそ　凡兆
鼠　ゆ　よ　すぶる　猫　すぶ　踊
猿　うぐひす　の　笠　打る　持うれ　芭蕉
猿　毎　ぐれ　持　つける　みの　助雪
員　ゆ　うふる　春　のりそぐ　象
炭　揚ぐ　よ　痛る　足　抜出　弧
猿　里人の　脚　かとる　田鶴　炭雄

俳　職人の　帽　る　ゆ　源　二芳
炭　雪の　ふ　ぶる　月　弧
猿　大年や　ものの　れる　ぐろ　羽紅
炭　神に　送　芸　雪の　土　根　泗雪
俳　寺の　ひけ　る　の　際　の　子光
猿　蜀牛　ら　ぶる　持　う　敗　快民
員　ころ　と　る　末　貧　の　花　荷子
俳　刀　や　る　ひ　げる　栗　刺　芭蕉
日　ち　揚　や　あ　る　鶏　ら　光蘭
日　橙　や　ゆ　ら　ぶ　る　な　立　国指
荒　石　ゆく　つ　ぶる　梅　か　り　之察
日　つ　れ　下　接木　ら　蕪　接　傘下

□ あるふるさとひとりすまる春は北窓　荷号
□ 花の信　誘て飛る　とび蝶外　蕉
□ 集れ　凡つるげる　白蓮れ　野水
□ 元ゆく　明すまし　たる雨外　一笑
□ 三日月　若草みる　明るが　惣助
□ 土橋やゝに出る　土筆　塩車
炭 鶯　鶯に飛んで　落るぬるぶ　為有
荒 蔦のゝ　たゝれ　ゝれ　抜ぶり　七林
猿序 俳諧　蛇の　なるこん　ゝゝ　壬角
○俗言ゝ　夕とゝ　つぶ　ゝの　るよ　かる　ゝあり　即夕　信ゝ　ゝま
ゝつゝ　ゝる　旬ゝ
炭 家の　ゝぶ　ゝま　ゝる　あゝ　ばみ　ゝり　利牟

続 蛇の　ゝ　ゝ　ゝ

まつり、地主神と伊勢ちがぐ、宇佐なる御くし、紙の袋ぶくろ
かしぶ様の袋さへ用ひつぶるばかりぞ。文章生に博士と
つゝ用ひり。源氏物語などに、いとをかし、これ今作る。ツト出ル
かなどいふに同じ。まづくろのはかまをとりて、今一方つゝあるを
ぬとりとりかなりとんえうくはつぐやなり

猿　い祈くとんかくれい年のくれ　路通

られて、誰が所にもあれいねらるゝ所あれとたんとたゝして。
用ゐるいつかり、そぞくみんとくるくるくるぎかり。この句、世にこれ世
事ゐいそぐくく。跡面ているゝ事、おのづからあるよ。ぬしより。
ゆくつもどもくその性をそもこ。あしぶきんとそぐめれ
ゐう。そこにとぐぐるかなりり

集　観音のいつくしの天やそれ花のもと　芭蕉

員　おすつかさも押あつ茅ヶ川　野水

荒　おくれ川北くりつ黒い木蔭の秋　芭蕉

日　曝川黄つ薄冬帝迅速　苔なき芭蕉の扇うれ　傘下

○上古さつもとつゝ天命後あり。冬のよ「なりいつ川」とする
の帯引重五ゝ為あり。それぞ昨日ゐんぶとて。上古の川のゐ
てもあぶ。つもしゝゐんあくつゝれりとみくり。上古のつ引
き。「おりいつ川」といふ。ぶられ弟川とつもも陸つく。そのる
の西面ぶるを平句なり。昨日を。思ひつもとる事句を
引くゝいんあわぐ。古句をそぶるぐ。ゐわく。上古のつもとぶ。
はるものんとゐんを誤りくつゝれるゐ。又を新句「光のを」と
つもとゝ作ゝれもゐる。これ天命後のつゝ白ゝ作
ゐあぐ。猪勇の例ぶ。ほ人ゐぶぐ。

○はるとつゝく。はといふてもよく。詞をはなれたり。
こゝで文章上の意のはつるなれば。その意の書はじ
今のようなるとこれは今の梅のようにもやとくらるゝ
なり

員　さくやこの花さくやこの花　荷子

こわく。赤ら「梅木の時雨」ばかりつくく　野水　はつかるつく
ばくくいつる分るなく。昆うえ本のられしもの。
はるはまるなくつくえいるや。この花の八月のはけ合
つくり辻相撲　人　此句まさはるとんえく。こゝりを吸く井
ひくやしるる際。ふくくしとはいで。引の案　ふくの案　ふれの
つくいつく。姉まし時さをまやや。をいつく。今のより分る
ものごとのんけ曲。笠のうちにはるこゝ。ふれのもの

七部集の冬のはつくくをいつることをみるべし

荒　蕎麦　蕎麦とさそれはる梅のさるふ　蕎麦

○つきつんなどかくくてはるはものく。つんそつるん
ふくくりとさるべし

荒　鳥羽のくらめ　放つ寸　ほくぎす　季秀

冬　すくてつく　世物くけーのびつん　野水

集　まくくを鶏のくいではん　草巻

日　白芥子　時雨の乳　ほつん　日

はく

はくく。昇つくつ分るつ。時結物よ
くくくくられるとみく世間のくくいつ
よりくくるはみ。あくくくるべし。松そくくつもくくるべて

ゆくさきはいかに成べきやらんとおもひつづけてこそ
まどはれぬるなれ。又そもわれ人ものをしらずして
そのつまどをかくしたりとて。なほ「あづまぢ」
とく別にあるべきものとおもふらんかの。今はかくなんある
なるべしとて。たちてとりあへずなんゆきぬる。
かぎりぎ。すべてうちべのものとよりて。あしたにかへれる
河らあるべし。わしくべしひとりうるべし。かくるまでかくうるとも。
つゆ事ごとよりてくるとも。ものさたすべきに
手をそく。はしとゆるして。おのれけしきの天をばうるとも。
海をとりめぐり。加羅ふ長などの国どもを奇合の判詞とのり
らしてのたまひ。このまくロが言葉の雑の階梯くくしくいふる
とぞくべし。奇人の制をやぶるべきあるべきなり。仏法者法流人を

を自在寺。制外なりとせしもあるべきいはれなれど。そもそもこれ
所なくはうつる。仏法の法とぞいはゆる。また古歌をとどめしも
べく天をばいとくんえくべくあるまじき法事なるべかり。我家を
ゆかしかけの制いかでるべきず犯すべう程で。いうぐうまいくられば
しべきあるべきかくも論ずる也。元初をんよりおのづう農
する物ちるべ。ふるつぐ時歌などのいづるべべ。ものん食。
さる程をくしたひとるべすべ事なりう

員　海ゑやべとうらうれはま　杉谷

この白を玄の白にく。人の海をみやまべとうくゆくべ
つくいひ。ゆくわくあんるべ。又海をきれさるるとあるべ
ちらくくるるの切なるべきてはしくくるべ海
とくくくあるべ
つのあるべ

員　とのゝ中なる小ぶねもこの風　赤泉
日　星陸さ西月ごゝろさすし　野水
春　綾をとられはゝいとゝ思ひ代　長葉
員　我子の縄一丈裾よりはく　さ和
冬　引ずる牛の焼こがれはく　杜國
員　所にく千魚の加減なげく　鶉雀
後　木首の孫孝こまもるは　凡兆
甑　あき飯より衣はのはく　曲水

○之身

[1]　これをだに知らぬこの世と為づく世に過去ノ[illegible]もせる志
家のしき志りしらぬ[illegible]こゝろ[illegible]

しゐへかぐてうすくする詞なり。こゝ五十音のかなづかひ。
志家のしき之身のしき。ちよひとゝ[illegible]のはうの所のるべ
いくかゝるわのるし。すべく伊緯の十音くはゝあちらるの
うちのうこと志てする詞なり。さく又佐緯く。むうのあるこち
ゝ志てうひゆくんるわべ。この緯緯とうくやべ。むうつるこの
事をこゝろうまるこゝとゝ。けかゝ過去ものこゝろ
こゝや謁の家かたり。さりふべこゝこゝ之身をとゝてるを。志家の
しゝこゝこゝうい方ゝべ。この之身を。既緯のるの分
いの例の方をべいつかり

荒　廣をよ一本植一さくら部　芙蓉
穂　すべしも和この庭をきへ伝まて　若葉
荒　をうこゝわ一本植ものの所あり所　野水

日　明ぬるや　詠　松下

日　雪とみし　物とさだめや　月の姿　一笑

日　大雅なる　雨ふこそ　夢の花　東延

日　夢ふこそ　明ぬ　ふの　野水

続　あ仙や　結婚　ものの　曲翠

日　明月　かくれ　星の　泥芹

荒　ひけ　底おこ　冬　桂　魚日

続　封つけ　文　雪　芭蕉

猿　わが　車と　鮫　丈草

員　引抜　車も　鶯　野水

俵　ふ　ぶ　鶯　雪霧

炭　なく　ものの　あ　芭蕉

猿　ひとり　亟　ふ　ふ　ぶ　ち　ふ　芭蕉

日　ず　ふ　や　ふ　た　ま　れ　春の雨　芭蕉

日　ふ　ん　ふ　ふ　ふ　ふ　小　門　の　霧　芭蕉

炭　此　ぶ　ふ　ふ　ふ　ふ　ふ　ふ　ば　ふ　ふ　ば　前句「すくいくるる荷」ハ蕪屋コレヲミレバコノ句ハ「ふ」ナドイフホドノ心ナリ　州平

冬　編　さ　ま　ま　ま　げ　の　う　ま　み　の　こ　ま　ま　芭蕉

前句「赤ちけくいやめぐ浅ゆかなる男」荷ヲコレヲミレバユエニデ人ニ坊ケラレテアハレザリシ中トレテツケラレシ句意ナリ「ハ」ハ其女ノ心ノ内ノサマヲミスル為ニテ、コレライトヨクオカレタリ

炭　う　う　柳　を　今　ま　月　ま　ま　芭蕉

俵　今宵　い　く　年　る　月　ま　の　ま　も　ま　く　こ　ま　ま　ま　く　水

似　れ　ど　ま　ま　支考

ふ　ま　ま　ま

あの、うとうとつて、俤言と、タとらのづる所と、〃こゝに、事、
こゝろく、手ともあるる身ど、今の世の手ごもはみるく、俤言のタ
をかゝしてつゝひるゝ〃まこの、ものと俤言のタくつゝみくいてあ
き詞ろく、その中ゝ、つゝひる〃引るめる〃などゝ〃しのわれ
あるは、ひとつゝ、タとつゝるわれど、このタハ〃也ゝくゝ清つゝ時ハ、
中のやまゝ出るゝや、されど歌人て、ゝくゝ、タとゝ薩摩よ
〃しくおくて、つゝ〃引るゝ引るめるなどあゝるゝとつゝて、中江文弘
らんナドノアタル所モアルコナリ 俳諧ゝ院の人ゝ、ゝわゝもとゝゝゝあゝかゝ、かゝて
のゝ〃とつゝ事あゝまゝ〃ゝるゝのなるハ、いゝ、俤言のまゝ〃ゝ俳諧
ゝわゝゝゝく、ゝゝゝ

めとく宮やうなり

○「山吹」「川ゐぜき」「笠きき」「なごり」「ハ」「ハ」「ハ」

こえあぐ。紫の芝浦ふく。紫の袖のわく。「ハ」「ハ」ちとはくる

袖ひく。天女殿にくいかなまと。こわく天子の人ぶと立ち事なれば

今く兒女のうとい事なり

やぐ

このやく昇なくるの「ハ」「ハ」のかひなる也。やくとは衣裳の

ものなれば。えつるまおくいのごぐく。「ハ」といぐき事とくくくう

やく。こなくさの事へうけくくする今なり。くくで「吹」やぐと云の

水「ハ」おりやぐくふぐくれる花をくまやとあるんく。やく殿と

云の水くぐるくなるくくといくまく。今山かくれなる花とみる

くくくくくくやかくくまんぐ。「ハ」「ハ」上ならのごぐく。をくらるも

ものをうけるわぐ。ものるくくのかくくのくくいくまくよ

くるくくとくくくくく

しら

この間、上の何とかいふ人、言葉の下に行く詞なり。「言葉の下に行く」とは、言葉の下に行く詞なり。「言葉の下に行く」とは、言葉の下に行く詞なり。「言葉の下に行く」とは

○咩利身

めり

この詞を今るよいて使あるなり。律の正律よりて
るるなと。カルとうひ。すこしなびかねと。メルとうるなく
かるり。いうとらつて。古抵そのの正律にく。すこしなびかある
茅昂。この詞の茅なり。かるるるよあれ。をあるとらなびかれど。す
こしなびめること事あるんと。めるこしらく。さわるべ。さるこ
先くらなびくが。すこしをめられめるあるの用しとんべ。こと
へば。京の川部等ぐわくるるめりこらを京かさるし
ととうなびれど。すこ八九を部等に相違をんどすこしをめれ
ゆるのこしめりこあるし。これ解とうひるさんなるめし。世あと
すなこしこしなびの中やこえかんこしあるし。ちうるよ今ひこん
なびなのあるし。ワが大沖四ふすなびくなるれどりそなびるを。

ちこやなるなこうなるこく。なこしたるるこしたるこしたる人
容めるこ。ちなびこかして。世差かめなび。ちなび何なるあれ。
人のるるこしちあ所こて。ここここわなの通解なるなられて。
よるなび言なるこ。かれなんこしなるこんまこしなるこ。ここをて。
事なびこよるこく。かるここを定めくこあるけく。西こあるくらやなる
詞とかるなびなここ。わなとまなこかここしめるこしるあるかる。
これ称 沖四ここの大るこの人なるし。な基俗のこあるれここの称さい
めるりこよるれこ。ちなの沖人なく。科こいめるこ定めるこるこう
こめるりここるれるこ。これるこうなる。こんこんなどここ科さ。
かるこうんなびこを多めるし。よこんなびこ。文章こ何めるこつ
う詞多し。ヲ二モ ヨムナリ 俗語なる。医者メク女メクかどこ。このめこと
る詞もめこ冊めるのめるこく。まなび学で医者こ女こここ使れど

すべて宮の医者ども如何あるべかりしかと思ひ
春日の八幡宮の御神託にもかくの事ども有りしと
とぶらひ奉りしに時分なりとて集中例さ
○引用されたる歌
○那利身

なり

この詞は上の詞にいひつけたり。人の有偏に出るなり
とは上のけ字たゞのなり。ふるくこゝろあり。有偏のなりにて
こゝなりとよむべし。帰リコヌジヤといふこゝ。この那利身のなりにて
八幡宮なりとよむべし。声ガスルワイといふなり。されどかゝる
る義。こゝろむつかしきなどいふ詞なるべし。こゝろいふこゝ。

乃事に持あくるものゝ。こゝにあるべきなどいふ
詞なり。あるべし

歳

かゝるまぎれに中の巳乃日とぞ
あるべかりけく野枝この白河殿ばかりにて
ちかくにくるの者ども来ぬ。中巳日ばかりにて
いとゝ白く。その内にかの猪のあるべきなり
事をとりやんとかくいとれるこゝ。無きたゞ何のまる
きてをばこゝにおりて天にはしる。こゝのこゝまるべきこゝ
なるべし。おのれ猪ども人にかりとりみ。さの
無きこゝにこの人の来所。これこゝにこゝ
せくこゝれるのこゝ。これこゝ。けり。平でむるの猪なるべしとこゝ

えくぼを笑ひて傍に寄り、むかしのなごりをもとめ、ふる
ゆかしきものをさぐりつけてこれをもとめ、所あらためてこれをとり
古今をあつめて、なのがれ俳諧をつくるべし

猿　雪の月　花の表こゆる　如行
炭　恰出す　時の雷　如屋
日　食事に雀　かくるゝ　文考
日　掠のえん　ねらく　風根
日　小ひるの　ひれ　穴一
菜　ゆく乃　羊　腸
員　ねつう　ひ　ひだり
春　濃すぐ　の　あるる
員　うゝ　ま　土

続　枇杷の葉の　ねらなり　初雪　斜茶
炭　人のゆく　ぬ　ゆくゝ　ぬ　冬ゝ　ぬ　ゆくゝ　ぬ　ゆくゝ　ぬ　ゆく

弧　芋とりくらべ芋をかくかな　弦須

○かるかれかるくなどかかるもの　芭蕉

猿　相のあるくばくなる解の月

○由久身

ゆく

これまでも裝れど物こそぐるふとぐ帥結にく
つうまり上のあるまりなどの傳くくいつるぐ〻次月く二何
ゑとらゑなり裝のけく〻この物ゑ行くくちけて帥結の
時く〻ゑゆく〻ゑゆくなど〻この事ゆくまなる形宮ゑいつるり
られ裝と帥結のさがひなり炭俵に梨一家のなぐわるゑと
みゑゆくゑゑひゑゑ裝なり〻これ人のみゑゆくまりなど〻又猿
蓑ゑ万手一四の面の豆ゑひゑゆく言られゑもゑ帥結のぐくゑられば〻

なるのゆく事なれば〻裝なり〻これゑふく〻ゑわるぐ

猿　葛城ノフモトヲ　行くゑ月ゆく行の影　芭蕉

荒　なるものゑとゑり柳れ　梨人

炭　柳の巣ゑれゆくゑや小わ屋　斜裝

集　ほくぐゑ消ゆくゑや島ひゑ川　芭蕉

日　燈びくまや左宮先ゆく裝の雲　日

いづまる物ゑゑぐるぐゑ〻この月ゑゆくはいゑるまゑぐ

猿　ゑづかすくゑりゆくゑ行くぐ　春郭

かゑゑゑけりられり

○句集拾遺百韻の文ゑ評をゑやるゑ曰〻月の形次ゑゑ細き
ゑゑ〻評ゑ〻ゑ粧ゑ細く〻ゑ月ゑゑぐれど〻次ゑの二字
重ゑれば〻ゑゑあゑあり〻この次ゑゑゑゑ〻今ゑゑゆくゑゑ〻この評

支考ぐんそく雨くさりゆくとそぞろなるくれゝるなるべし。
げこ雨ぎとらつぐ。形のまふなくかるあゝかの幻術の効うす
ぎゆくとらくぐ。支考ぐんそけべう。これをまくられぐ。雨る
仏語ぐく伝語ぐくすむものもひぐく。箱ぎまくとくれそん事用
らうかり。さわぐ白意よりわく雖伝ハえくひ用ぐるもし

○阿不身

あゝ

これまく裝なれども仲結くかれるかり。仏なくて用ぐ。あて
ゝ何ぐらく。いづるもあゝなからぐかど。不の字をつぐくつりひけり。
かの鵜葺草（ウガヤフキアヘズノミコト）葺不合命（フキアヘズノミコト）の御名かど。即この巻ぢにく。御寿屋を
いまぐかふくくも用くくれさせくもり。御母寿のくくをすかれ
ぐ。これにく母の前仏なるべ。さわぐ世羽。テ井ル。モナイ　一サヘ

ナイ　かどくゝ伝言ゝあくなく。そくそんとする物るもの。その間のるき
さくをくり用かり。奇ゝハ雨そくをくりあぐぢくあるゝ。けくのか
のかくふかり。ゝくのふ。雨ぢくふのつぐ。雨とりもるぐ雨ちひもあぐぢハあ
ぐ愛めるりみぢあくくかどやくくるくくれりゝ。ゝ奇。
雨ひふく雨ゐくなどけるれこの用のかるるり。作事倒す

○也留身

やる

これまく裝を仲結くくるかり。くくるぐ。ゝくを侍とする
かどくゝ雨ぢく。裝かり。ゝくまくゝくくるかどあるい
裝かり。雨やくくなるぐ。雨ひやるかどいのけく。裝ゝかりぐ。くるゝが
ぐくゝ。伝ここのひのやくくくる用。奇愛ゝ雨るくくるゝ。世ひを
やりくくゝ仏んかり。上古ゝくくハ多く仏遣岡のんくくる用かり。伝世

[illegible]

[illegible]

[illegible]

猿　[illegible]

[illegible]

○加奴身

かぬ

[illegible]

荒　かやうの中に出るある　切穂ふ　炊ふ

同　山ゆゑ　[illegible]　荷ふ

同　一トめぐり　人名　[illegible]　尚白

[illegible]

○かぬく　かぬ　[illegible]

集　軒　軒　[illegible]　芭蕉

同　月　[illegible]　湯尾　[illegible]　同

○被身

る

[illegible]

つゝ二タルのゝ方り。「いとるゝ世ゝイハレルのゝかり。すゝ
引るゝはゝ方り。すゝくわゝくせんゝ思ゝゝ。落ゝゝゝ月
花ゝ忘ゝゝゝゝん方り。きゝれゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝ方りゝゝゝゝゝ。ゝゝゝ。「月花ゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝ。月の人月ゝを身ゝ侍ゝゝ。ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
人のゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝれをれゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝ二例あり。ゝ一例ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

炭　麻の種　毎年一踏まるゝの花　挙

ゝ二例ゝ。ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

炭　分ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

炭　ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

続　ゝれゝ年一ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ　樽の蕃　芭蕉

仕引ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

「かゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

炭　栗ゝ苅られくひろ赤畠地　挙

集　樹白ゝきのゝや鶴を盗られ　芭蕉

同　ゝれゝ伺殷ゝゝゝゝたゝゝゝゝ　同

同　ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

○令身

寸

これく侍言よく。サスセルかどつ羽く。あらぐ「あぐすいよ
ま。流サスのんかり。「わ子くいふく。渡サスのんかり。「いそくいふ。
イハセルのんかり。これ羽くこうやーむる義なり。

集　吹しぐす　石上薄岡の野ふり松　芭蕉
同　そこの古れを筆ちすれ秋乃風　同
同　又雅　こゆるれをさびしがるやよりんこ曽　同
同　鶯ちいうるんちゃくすしん　同
俳　引たてむ夜あくするこ花ちさ　同
さしもせしもししもかくしくつるひりぶれも鶯掛ふ門ち
あるかみくこうべ

俳　一ト月ろうるる来ちせ弥ちた　文蓋
同　弱法師わが門ゆる留守の礼　碁角

同　ちゆつて鳥月のぐせつくり猶法　配力
こうくこ鶯こうぐ。いづもも紫の雲乃衣緯ちかしるかり。
ち。「鶯ちゆるち「のぐち　世ちす紫ノとう詞のうちもく。金する
詞ちわるこく。神妙こかわぐ。深ぐべうべ

春　こうこうる鶯ふ　ちの　海乃山　且藁
れも行上ちはぐく。「つこ詞の衣緯こかうする。今
詞ちあ。行ぐこ。この例こくこ。こうする。こうする
「かこを「るこうかぐこつ詞の例し

炭　むすめ行かう人こ　あこ留め　芭蕉
同　壁を当くもくねやめ　月　同
同　のこぐちかこきちて　薪　炭
集　こうぐわこ　こうこみせこう　茶筅　芭蕉

これらの句を四くこの例なり。よくくんずべし

集　雲をとり人とやさはる月の夜　芭蕉

む

むくこれく。手こつる詞の仕ぐまりる詞なるを。掛結掛
ゑくゑくゑゆるぐ。上古よりしたつるる行を考れ
ど。仮名つかぐ。むくのくをうるより。これ仮上のすとつて
なるべく。サスルかどゝいふ。そこで「ゆわむ」「ゆるかどゝ
むかり。それどすとむとく。佐経麻経のさゞめくゝるすに爲
すくゝゆ。なるもすぐく。その口ぎをさぐくゝもるとゝ。むと
いふ時く。その口ぎとゆとまるゝ。内外のさゞめあり。上古
ゑ「むといふく。手ゑこのゆるゝ。外へ口ぎゝすべき
こゝゆゆとゆくゝむる者なりゝゝ。ゝるべし

す

これまゝ裝ゝれど。掛結ゝゝいふく。ゝゝゝ口で。ゝゝ
で「花のうぐする」ゝゝゝ

続　白雨や中すぎしく蟬の声　四季

猿　月ひとやしつの城の松風　寸東

徒　昼ゆくるのくぐもやむ国分　杉風

猿　さもしくも茶かうかうる茶をて　九兆

これくらは裳かり。ぐくすぐりぐ

春　汐瓶ひとりの月を三ぐしつるけ　帛主

世句を。引くのかるしてなり

○如身

ごとく

ごとく。ごとくごとくごとく

○上古ハ、なんでもいつてゝあつた。即如のんびり、へらづゝかな
へまさかなぐあり。それで如しなすゝく別義にく。上古ハも
如しとつゝひとり。この義別て。吉歌時結ゝくゝとり

○八隊

○義隊

み

これを。ゝをゝくゝ。ゝ常あゝ。ゝ神とゝゝなどゝ
ゝかり。かゝゝゝ。ゝをゝむなどゝむを伊繕ゝかゝる詞なり。
伊繕ゝゝゝまあゝ。伝ゝのサニゝゝ詞ゝあるんゝくゝかゝく。は
例ゝいあゝ移ど。伊勢物語ゝ同ゝゝるゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝ多ゝ。このみゝ。ゝでゝくゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝを体ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ伝ゝ
がゝゝゝゝゝゝ。ゝゝゝゝ附伝ゝゝゝゝ。伝ゝのサニのゝゝ。ゝみをゝゝ

ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

人ハ是非一度ハツヒニ骨ヲホドクニイタルベキ身ナレバ・肌サムシトテウレフベキニアラヌヲ・猶衣ヲカサネ着ルコトノ心ナリ・古人詞ニカアリシコノ一句ニテモ見ツベシ

さ

これらの何ものかはかりそめ詞のすさまじきもあれど・そのかれあり・みとうらやましからぬ所をもいふなれど・俗なるものなり・さいこの時くるのものなり・ことさらにとくるこそいとゆかしくすくなくあり・こそ・ゆるみへけくちくするなれど・その用ひすんでぎ事かり・俗なる苦シミこそ苦シサなれ・自然とこのわれあるなるべし・上のみを・俗言のサニこあつれども・こそ・古のめくさしとみて別あり・されど古言・俗言をいつる事・くりくいこで・廉かなるべし・凡詞のをとくやんこそ・経緯五十音しの条を考る

より外のものあるまじきなり・こはあるべきよやぐ

様　はしらさ　牡丹の花乃真裸　赤茶
荒　墓　やうのまれぞこさ　文鞠
様　さびさに客人やこふつり　高白
月　雲あるごうあ　ゆるの　移ろ　赤茶
月　あくれさや　背麻うる　露のうち　梔市
月　京　紫　ぞの月ち　傷仲間　丈草
炭　ちんちる　白乃　ふうあ　長閑さ　野坡
月　門　ぞくぶんそわる　面白さ　苦蕗
月　たぐ　寄　簾さに　すぐ　る　刺半
月　師　走　は丘尼の　祝　ぞ　孤屋
続　作　ヲ　加　歳乃ちぐ　夜　ぞ　馬莧

日　引きて　なかくこそ子なるこそやさ　芭蕉
冬　さげうちに飯蛙のごく月の雨　重五
員　旅するうちのこころ奇麗さ　嵐梧
猿　口の葉さ盥の屋乃　鱶うれ　凡兆
荒　さわさやねいこぬさぴの部ち　傘下
続　うつ〜さや麻赤の笠もとさの蕪　惟然
日　自中さや月を遠り歪巨　焼　四木
日　雪るる店のやこうの丹　昇さか　万乎
炭　ひさこさ　花　ひのよひのこくさか　荊口
日　帯一　自ょ雪の藤洗のさむひか　嵐刀
猿　メぐりよ　よぐれくつきひつさか　羽紅
炭　蕎杉を　をえうけ多町のありさか　炉る

続　祖　て　人参の根乃さむさか　法園
日　炭ゆよ　姫ゆ　ゆ　ゆ　ゆつさうれ　素逸
炭　人ゑの　根　ま　ま　ゆるゆ　野坡
日　園責　御　侍　所の　昇さか　岱凡
続　すぐ〜さや　擦り　昇ょ　ぐ　ぐさげる　支考
員　さび　さ　ま　井の　扇乃　みの　泉
続　ゆ　ゆ　ゆ

猿　ちる付のこゝろあさよ芭蕉人

日　晝時ふる雪の音たちてさよ　芭蕉

炭　湯づけ　けんどゝ　さゝ　手の音　翁

猿　この筋えて　張まえらず不自由さよ　芭蕉

○久隊

く

これを、「ゆと」いふを、「かゝ」「このゝ」などゝ云くせり。その事なれども、ゆとゝ云事なくして、ふとゝ云なり。ふとゝ「ある」なり。ゆとゝ「ある」なり。ゆとゝ「ある」なり。ゆ

かゝ

これらゝ俗言ゝ タガヨイハ世テ ハテソデハアルマイカヤ ジヤハ世テ
などゝいふこと。世ごとの俗言なり。俳諧ゝ俗言ゝ
これを捨ゝ雅ゝ言ゝ用ゆ。その理論する人より稀にて語る和
なり。西行上人の用ゆゝ歌などハ。古の加ゝ言ゝ葉ゝ
乃ゝ言ゝ葉ゝ みるべし。これをもゝ歌ゝ用ゆゝ詩ゝ言ゝ葉ゝ
雅ゝ言ゝ用ゆゝ。手ゝ爾ゝ俗語ゝ用ゆゝ。奇ゝ言ゝ句ゝ
まで用ゆ。俳諧ゝ雅ゝ言ゝ用ゆゝ事なり

荒 千觀ゞ 枕草子 馬もかやうゝ年のくれ 豊角

有國曰。この前ゝ人のゝ言ゝ葉ゝ つゝ用ゆゝ。俳諧ゝ俗
言のまゝを用ゆゝ。雅ゝ言ゝ ハ自在なるべゝ。
ゝ。奇ゝ言ゝ句ゝ 俳諧ゝ言ゝ葉ゝ 雅ゝ言ゝ
用ゆゝ。言語の道斷する時の用ゆゝ

言語ゝ道斷ゝ 心行ゝ所滅ゝ

盃のわざゝ なるべし。ゝ言ゝ葉ゝ 俳諧ゝ俗言ゝ ゝ
ゝ自在ゝ ひゝ ゝ言語道斷の時乃
用ゆゝ事 ゝ ゝ 松の木ゝ
用ゆゝ ゝ ゝ ハ。宮ゝ ゝ
ゝ。又 ゝ 五位の鍋ゝ ゝ ハ。鍋家の
所医ゝ ゝ ゝ。又 ゝ 逆ゝ ゝ 時の
ゝ ゝ。 ゝ ゝ
ゝ ゝ ゝ。一
俳諧ゝ ゝ ゝ。これ ゝ 自在ゝ
難ゝ。俳諧ゝ ゝ ゝ
諧ゝ ゝ ゝ

[illegible]

[illegible]

[illegible]

言葉をもしてせんなき。歌も俳諧もこころにあるべく
きなり。俳諧と詞の自在なるより、かるがるしきる
事。古人ぶん体あり。今の人よくこれ物事なり。俗
言にもあり。古言にもあり。物事なるべし。奇なみて
は滑稽のこころなるべし。さてあるべし。
こころをぶんぴひれば。俗にいはるも拙なる
もいとこころざし。詞のまことに自在不自在を弾ずる事。
この内に平仄をのぞくもし。俳諧を法にし。奇体法なる
おられぬべし。奇よりみて。俳諧をいはるれども。かるみて

うるはしきあるべし。不自在なるべし。得あり。自在
なるべし。失なるべし。わが霊天地の所為なり。
かるべき

○奈信隊

上古くなりぬるよりあり。中昔よりかなと。これの字本
をひらかり。ふれく ヤサキニ ニアハセテかなづかひ。並の字はんなり。
一事のうへ今一事のうへあるべしとなり。これをいわく事
きはとなるする詞とんぐ。集中例多

○毋乃隊

すべり物なる物はいかなるべし。御法なりとなり。また

[illegible]

事ゝもの哉。世ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]

詞の詞なれば、ハタトアタル形容なり。音義の詞なる事いふべし。集中例かず

○加天隊

かて

この詞、難の字をんとみるべきあり。まづ全く法きこえる人なり。おなじくがてぬがてなどいふことば、雖の字とあつまりて不難のんとかわるべく、かつて駁きんとかるあり。おなじ乃法者しるものく、さらしくまつくれたり。主なるものすくこれて勝の字のんにて、難の字をうしくしくもむすぶ被勝らんをえく詞どるものかり。されば字を書かるし、ここに主用のつるれど、また漢字どもの例を、わが國なる本の詞なり。ひのくにの漢土より来れるものにて、我邦の詞とうるさのひとをかくさるにあれ。

このの、例をもかり、字をまし、主うるに、ものもまれだ、これをよく知るべき人なり。字をもかの詞と書きまるより、うるんをあやまりくるべきなり。くぶべしあるまなどいふ詞は、蓋恰の字をかくるあり。漢土よりもまれる詞のごとく人なるより、おなじかたくよられく。わが國なる本の詞かるとや、されば必ずも、雖の字をよむあるべきなり。されのでまれるにく、被勝のんかり、されるべきなり。出るものるるるよりるきかく、出るわざすぐるわざのやられぬるいるとまて、おなじかたくまるハ、不被勝のんにく、わかれもはべくるのるれやられぬるく、けかるべくさ、そのすぐれるさのうをうん、ゲてぬハ、そのかれざるのうをうんぐのつるまし。イヅレモ詞ニイヘル方ハ客ナリ、陰ニナリタル方ガ主ナリ。コレニカギラヌコトナガラ、ナホ心ウルタヨリニイフナリ。さるるそ

おなじく不勝とりれさるべかるべし。集中例みず

○いかめしがくこのわれよりんべ。さてこで用ひるべし。

ごとくなどいふ時こそいかめしくきめく。かとかぬくいふ詞く。神

代より思兼神といふ神あり。此神く。今目前なる所の一段也

とおもふ。智恵の名なり。これ第の第なり。うのか用ひ用ひ

が用ひこがひなどいふ語。この内にく。今くいまで所にて古

にもこともいふ。ねども。かまとも。ひとかとつかり。

きれで用ひあらず。ゆめくの段をひとりあく今ゆるべ

らなり。用ひでしらく。何にもあれ。わがゆうにてするんの負け

てわがこもある時の詞なれど。かねく。わがんりさやとこひて

ゆるあるく。ごくて物のこゆめゆりぬにく。何のいづれこと

なり。ことくなひとりべ。すべく天ホ波ハかく

のごくらべくきるのこと。あくるびもべ。

古今古今のことをもしるべ。こべりず。こべりつりひきべりぬる

なれど。ほあくて。ただ古今の白拍子とあげて

こ時ふるいてあれふ事なり。上古くくこれとふ

びこりくこを四段で。詞く雅俗るるこべ。おの所る天ホ

波のくかりなり。今詞く雅俗出るく段。くくこれ

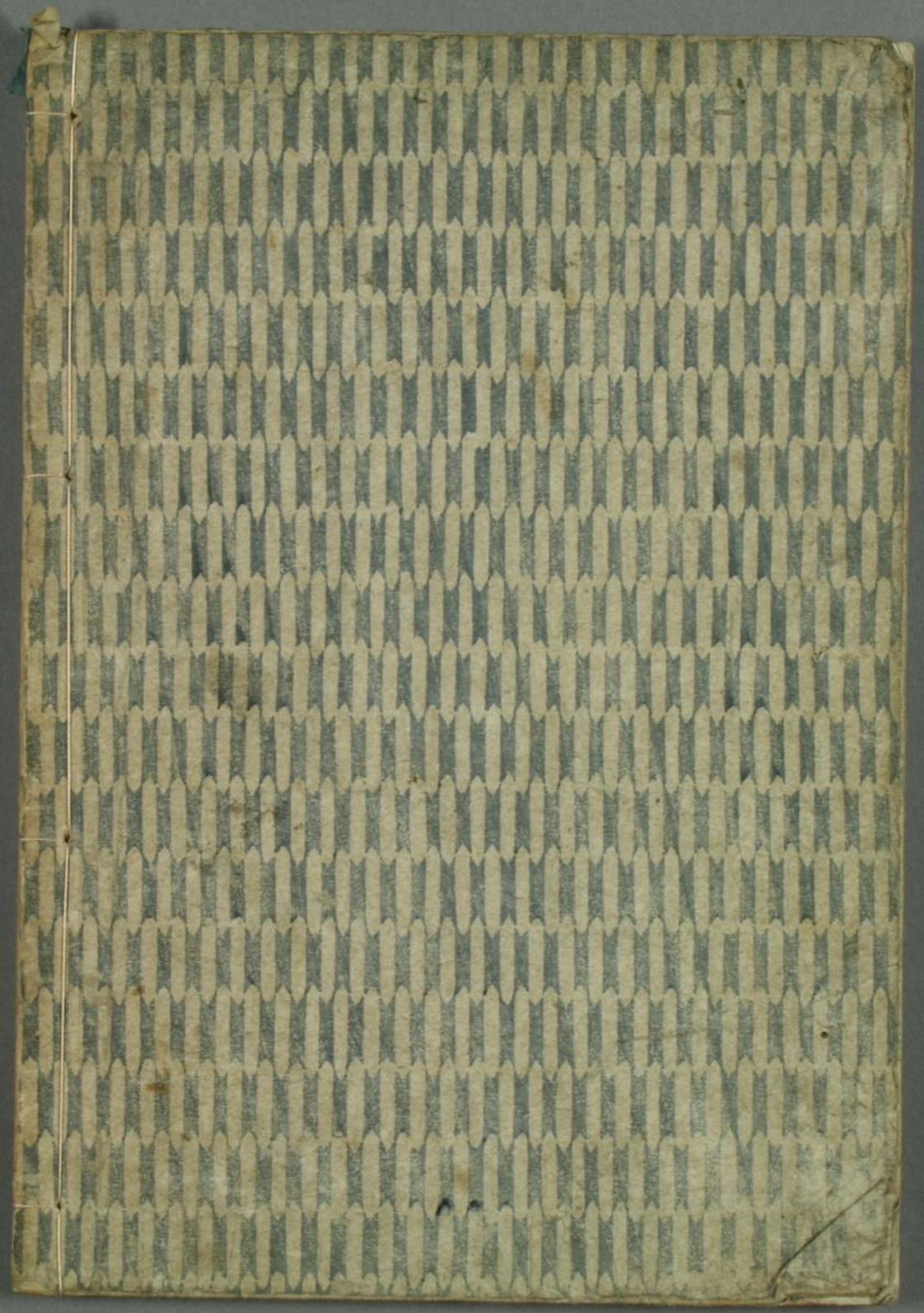
とこれがこなりるは。今人く古人よりも事多くなれ

ばこらべ

俳諧天ホ波枡巻之六　大尾

南臺藏梓

文化四年丁卯仲冬

皇都　野田治兵衛
中川藤四郎
佐々木總四郎
葛西市郎兵衛
橘仙堂善兵衛
柳原喜兵衛
野田七兵衛

浪華　東武